

研究論文

学生の学習動機をもとにしたFDの構築に関する考察 —学生の授業外学習を促す要因に注目して—

吉田 博¹⁾ 金西計英¹⁾ Steve T. FUKUDA²⁾ 戸川 聡³⁾

¹⁾ 徳島大学大学開放実践センター ²⁾ 徳島大学全学共通教育センター ³⁾ 四国大学経営情報学部

要約：本研究では、学生の授業外学習の時間に注目して、学習を促す要因を調査、分析する。そこで、明らかになった結果をもとにして、徳島大学の全学FD推進プログラムにおいて、学生の学びにつながる実質的なFDを構築するための考察を行う。調査の対象は徳島大学で、2009年度後期に実施された授業のうち、数学と英語の2つの授業である。これらの授業を受講している学生に、毎回の授業終了後に一週間を振り返ってもらい、授業外学習の時間と学習を行うきっかけとなった出来事についての記述を依頼した。その内容を分析することで、①授業方法、②授業の設計、③課題、④教材・資料、⑤学生理解の5つの内容について、学生の授業外学習を促す要因との因果関係を見ることができた。

(キーワード：授業外学習時間、授業外学習を促す要因、徳島大学全学FD推進プログラム)

Examining Faculty Development programs based on student learning motivation - Considering factors encouraging student learning outside the classroom -

Hiroshi YOSHIDA¹⁾ Kazuhide KANENISHI¹⁾ Steve T. FUKUDA²⁾ Satoshi TOGAWA³⁾

¹⁾ Center for University Extension, The University of Tokushima

²⁾ Center for General Education, The University of Tokushima

³⁾ Faculty of Management Information, Shikoku University

Abstract: In this study we analyzed factors encouraging students to learn outside the classroom, with special attention to students learning time outside the classroom. Based on the results of this study we aimed at constructing substantial FD to enhance students learning by campus-wide Faculty Development programs at the University of Tokushima. The subjects for our investigation were the students of two classes of math and English in the latter term of 2009 at the University of Tokushima. Every week after classes we asked the students in the questionnaire about their learning time outside the classroom and what motivated them to study, looking back over a class they previously attended. By analyzing the results of the questionnaire, we could find out five things that affected their motivation to study: ①Teaching method, ②Course design, ③Homework, ④Teaching materials, ⑤Students understanding the class.

(Keywords: learning time outside the classroom, factors encouraging learning outside the classroom, campus-wide Faculty Development programs at The University of Tokushima)

1. はじめに

1998年10月の大学教育審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」において、単位制度の実質化が強く叫ばれた¹⁾。大学設置基準で定められている単位制度に基づけば、授業外学習を含めて、45時間で1単位とすることが定められている。しかし、実際には我が国の大学の授業において、この考えが徹底されているとは言い難い調査結果がいくつも見られる。平成19年度に徳島大学が実施した学生の学習に関する実態調査「ラーニングライフ」^{※1}によると、1日の学習時間が1時間未満であると答えた学生の割合が、ほとんどの学科において、60%を超えていることがわかった。また、全国的に実施されている

大学生を対象とした学習時間に関する各種調査でも、1日の学習時間が1時間未満である学生の割合は70%に達している^{2),3),4),5)}。2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」においても、我が国の学生の学習時間は短いとの指摘があり、各大学では学習時間などの、このような実態を把握したうえで、教育内容、方法の改

^{※1} 平成19年度に、徳島大学に在学する学部学生全員5985人を対象として、徳島大学生の学習意識や学習に関する実態を把握し、今後の教育改革並びに就学指導に資する基礎資料を得ることを目的に、調査票を配布・回収して、「ラーニングライフ」を作成した。調査票の回収率は63.2%であった。

善に生かすことが必要であるとされている⁶⁾。このような背景から、我が国では、学生の授業外学習の問題や大学教育の質向上が問題にされていることがわかる。

学生の学習行動と授業の構造には、因果関係があることが、以下の先行研究により明らかにされている。藤岡(2001)によると、大学の授業において、授業の構造と学生の学習行動の両者の間には、かなりの程度の相関を見出すことができるとある⁷⁾。ここでの、授業の構造とは、日時、講義名、受講者数などの基本的情報、課題、教員の発話など、授業に関わるさまざまな要素のことを指している。また、学生の学習行動とは授業リフレクションシートを用いて、授業において学生に発見があったか、知るという経験ができたか、問いが生まれたり確かめたいという欲求が生まれたか、そしてさらに調べる、聞く、読む、ふりかえる等の行動化がはかれたかを調査したものである。また、溝上(1997)によると、学習行動において、学習者自らが奮い立って内発的動機付けを引き起こすことは希であり、多くの場合、学習者の内発的動機づけの状態は、授業の構成要素、教師、学生のパーソナリティや自己概念等様々な要因が絡み合って成立すると言われている⁸⁾。これらの先行研究から、学生の授業外学習を促す要因は、さまざまな要素が絡み合っているものの、授業の構造や教員の発話などが重要な要素の一つであることがわかる。

一方、現代における学習理論については、久保田(2000)が構成主義にもとづく学習理論をもとに、現代社会での「学び」の基本が人と人とのコミュニケーションにあり、学生と教員、学生同士の対話を通じた学びの重要性について述べている⁹⁾。また、中原・長岡(2009)によると、「対話」というものは、コミュニケーションを通じて人々の考え方、振舞い方、あり方、ひいては個人と個人の関係や、組織そのもののあり方を、主体的に「変容」させていき、この「変容プロセス」を「学び」と考えている¹⁰⁾。澤田(2009)の研究では、能動的な学習動機づけ要因について、教員の授業の工夫や授業内相互作用の取り組みが加わることで、自己の学習についての有意義感や受

講満足度が高められるとある¹¹⁾。

そこで、本研究では、大学の授業における教員、学生間の相互作用に注目し、どのような学びの動機付けがなされているのかについて、学生の授業外学習を行う動機と、授業との因果関係を質的なデータをもとに分析する。そして、この分析から明らかになった授業外学習を促す要因をもとにして、徳島大学の全学FD推進プログラムにおいて、学生の学びに繋がる実質的なFDを構築するための考察を行う。

2. 調査データの収集方法

調査データの収集方法として、筆者が対象となる授業を毎回参与観察し、授業の展開、注目すべき教員の発言、学生の様子、教員と学生とのやり取りなどを記録した。同時に教員の言動、態度、教員と学生とのやり取りを中心にビデオ撮影を行った。また授業終了後に5分程度、学生に1週間を振り返ってもらうための時間をとり、リフレクションシートへの記述を依頼した。リフレクションシートとは、授業外学習の時間、学習内容、学習をするきっかけになった出来事などを記述するシートである。また、最後の授業終了後に、授業後アンケートとして、学生に授業全体を振り返ってもらい、学習を行うきっかけになった出来事、学習意欲が向上したり、モチベーションが上がる要因になっていることなどの記述を依頼した。

3. 対象授業

(1) 対象授業とその理由

本研究の対象とした授業は、徳島大学で2009年度後期に実施された、数学と英語の2つの授業である。数学の授業はグラフ理論に関する工学部の専門科目で工学部1年生の10名が履修している。英語の授業は共通教育のプレゼンテーションを中心とした発信型の授業で、工学部2年生の20名が履修している。以上の授業は、履修人数が少なく、学生と教員とのかかわりを観察するのに適していて、これらの授業では担当教員が、授業の中で学生の主体的な学びを促す相互作用を多く取り入れていたため対象とした。

(2) 対象授業の概要

数学の授業は、2名の教員(T, K)が担当し、講義と演習を交互に行う授業である(表1)。講義は、パワーポイントを用いて教員が説明する、講義スタイルの授業である。演習では、取り扱う問題があらかじめ宿題として出され、学生は授業までに解いてくる。授業の中で問題の解説を行うが、このときに学生が指名され、板書して解答について説明する場面もあった。また、徳島大学のu-Learningシステムを利用しているため、授業で使用する資料をweb上にアップしておくことで、学生が自由にダウンロードすることができる。そのため、学生は授業が始まるまでに、資料を入手し、予習を行うことができる。英語の授業は、英語によるプレゼンテーションを中心とした授業で、評価の対象となるメインのプレゼンテーションが3回ある(表2)。その他の授業では、3~5名のグループにおいて、1分間スピーチ、役割やテーマを決めたミニプレゼンテーションを行い、プレゼンテーションのスキルや知識、姿勢などを身に付け、単語の意味の確認などを行った。

表1 数学の授業の概要

授業回数	授業日	担当教員	授業形態
1	10月1日	T	ガイダンス
2	10月8日	T	講義
3	10月15日	T	演習
4	10月22日	T	講義
5	10月29日	T	演習
6	11月5日	T	講義
7	11月12日	T	演習
8	11月19日	K	講義
9	11月26日	K	講義・演習
10	12月3日	T	講義
11	12月10日	T	演習
12	12月24日	K	講義
13	1月14日	K	講義
14	1月21日	K	講義・演習
15	1月28日	K	テスト

表2 英語の授業の概要

授業回数	授業日	主な授業内容
1	10月6日	ガイダンス
2	10月13日	教員のサンプル「良いプレゼン、悪いプレゼン」の紹介
3	10月20日	小グループによるミニプレゼンテーション テーマは、「自分の誕生日に起こった出来事」「面接」など
4	11月10日	小グループによるミニプレゼンテーション テーマは、「カバンの中身」次回の準備など
5	11月24日	プレゼンテーション①
6	12月1日	英語でアンケートを取りデータをグラフや表にまとめる1
7	12月8日	英語でアンケートを取りデータをグラフや表にまとめる2 小グループにおいて、まとめた内容のプレゼン
8	12月15日	プレゼンテーション②
9	12月22日	前回の振り返りと自己目標設定
10	1月19日	アドリブでの1分間スピーチ
11	1月26日	プレゼンテーション(練習)
12	2月2日	プレゼンテーション③
13	2月9日	振り返り

4. データの分析

(1) 授業外学習時間の変化

本研究で用いる授業外学習時間とは、授業が終了してから次の授業までの間に行なわれた、対象の授業の内容に関する、授業以外での学習時間のことで、学生のリフレクションシートより収集した数値データである。したがって、例えば第3回目の授業における授業外学習時間は、第2回目の授業終了後から第3回目の授業開始までの間に行われた、対象の授業内容に関する授業以外での学習時間のことである。

図1は、数学の授業における授業外学習時間のクラス平均の変化を表している。授業の前半、第2回目から第7回目までの授業外学習時間は、演習の授業の前に多くなっていることから宿題を解くために、授業外学習時間が多くなっていて、宿題がないと授業外学習時間は少なくなっていることがわかる。しかし、第8回目以降は授業外学習時間が減少していき、第13回目以降は増加している。第15回目の授業外学習時間のクラス平均は、テスト勉強のため156分であった。図1では、他の日に比べ非常に多くなっていたため、

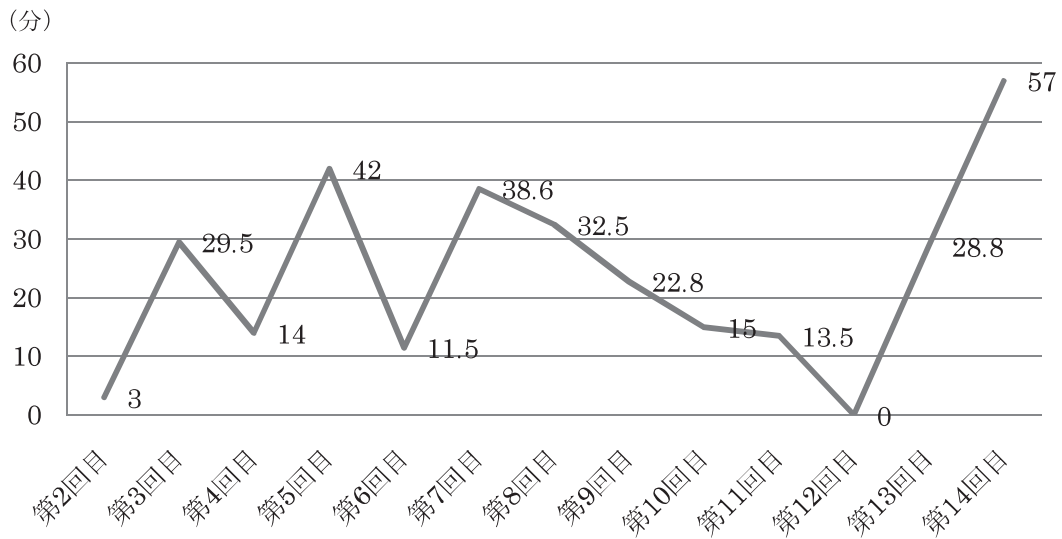


図1 数学の授業における授業外学習時間のクラス平均

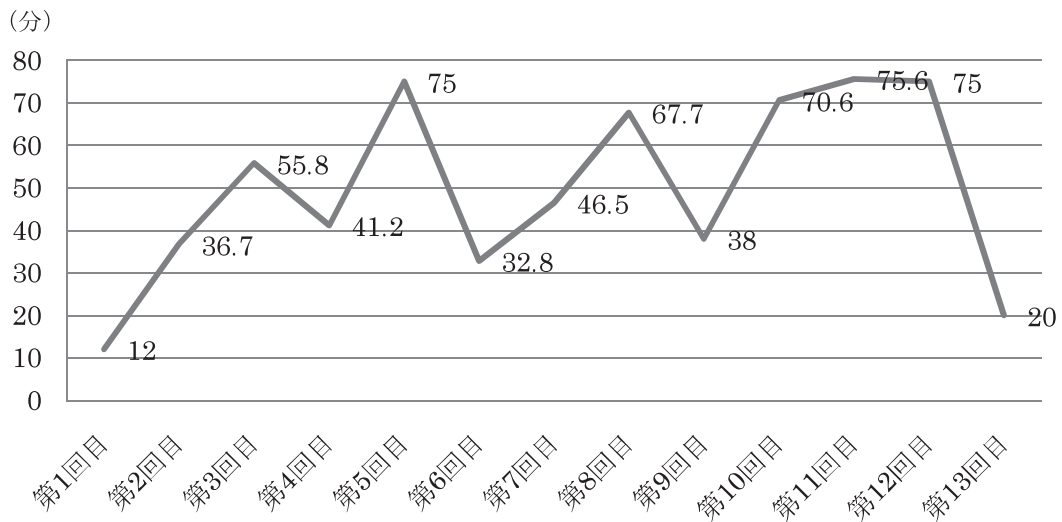


図2 英語の授業における授業外学習時間のクラス平均

第15回目の授業のデータを省いてある。

図2は、英語の授業における授業外学習時間のクラス平均の変化を表している。実際には、第11回目の授業外学習時間のクラス平均が125分であったが、これはある一人の学生がTOEICの試験勉強のため、1週間で840分の学習を行ったためであり、この授業とは関係がないので、この学生のデータを省くことにした。結果の概観を見てみると、第5, 8, 10, 11, 12回目の授業外学習時間が多くなっている。これはメインのプレゼンテーションが、第5, 8, 12回目の授業であったことから、その準備のため授業外学習時間が多くなっていることがわかる。特に、冬休みが1カ月近くあるため第10回目の授業(12月22日)では、教員が最後のプレゼンに向けて、準備をするよう

に促した。さらに、第11回目の授業で最後のプレゼンテーションのための練習を授業の中で行っているため、第10~12回にかけて授業外学習時間が多くなっている。以下では、より詳しい結果の分析を行う。

(2) 数学の授業に関する分析

数学の授業において、前半は宿題が出されると、授業外学習時間が増加しているという傾向が見られたが、後半はその傾向が見られなくなっている。そこで、宿題が出された日と宿題が出されなかった日の授業外学習時間を分けてグラフに表した(図3、図4)。すると、第8回目の授業外学習時間は、宿題が出されなかったにもかかわらず、他の日に比べて多くなっている。また、第9回目、

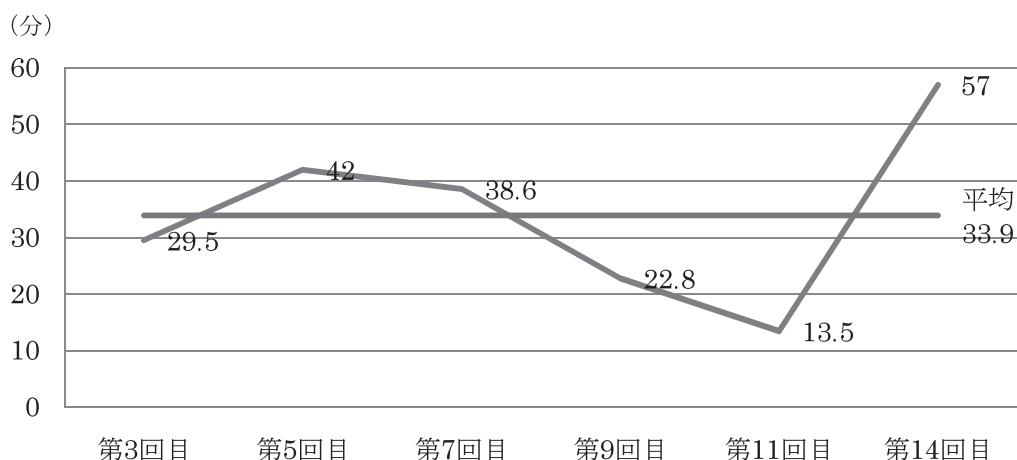


図3 宿題が出た日の学習平均時間

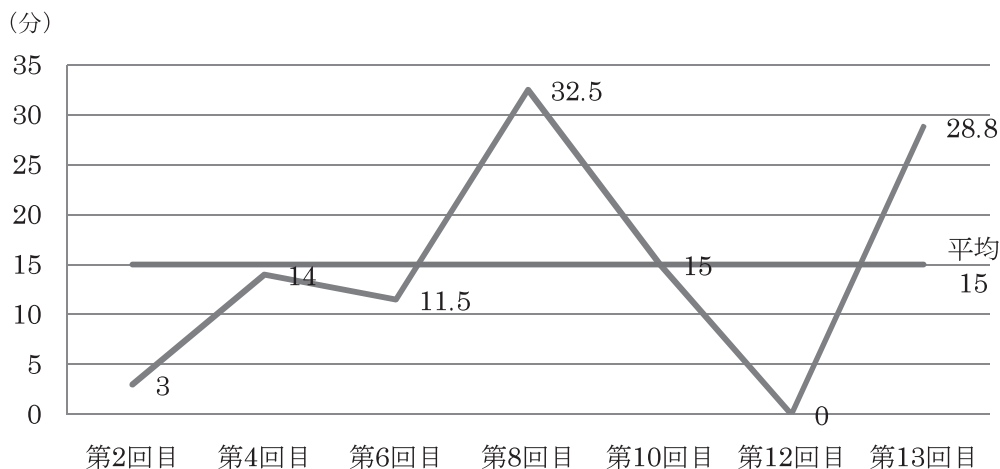


図4 宿題が出なかった日の学習平均時間

第11回目の授業外学習時間は、宿題が出されたにもかかわらず、他の日に比べて少なくなっている。この3回の授業について、学生のリフレクションシートの中から学習内容と学習動機に関する記述を分析する。

まず、第8日目は10名中9名が授業外学習を行っていて、授業外学習の内容は予習が8名、復習が3名（重複あり）であった。普段から予習を行っている学生は、特定の2,3名である。学生の学習動機に関する記述を見ると、予習を行った動機として「難しそうだったから。」「資料が早めに（web上に）上がっていたから。」などが挙げられていた。また、復習を行った動機としては「前回の授業中だけでは理解できなかったから」などが挙げられていた。その他の日でも、学習動機において、教材や授業の難易度に関する記述が見られる。例えば、「資料を見て難しいと思ったから。」「資料を見て少し理解する必要があると思ったから。」などが挙げられていて、次の授業で使用する教材の内容を確認し、難しい内容ならば予習を行っていることがわかる。また、「だんだん難しくなってきたので、やらないとまずいと思った。」「分からないままにしておくなかつた。」といった記述も挙げられていることから、あらかじめ次の授業内容を知ることができ、難しければ予習を行い、理解できていない内容があれば、復習をしようとしていることが伺える。

次に第9,11回目の授業外学習における学習動機を見てみると、「今回の授業で、まだ問題の意味が理解できていたから」「講義内容は理解できたと思うから」といった、授業内容が理解できていたという記述が見られる。また「ちょっと問題が少ないように感じました」「問題が少なかつたのですぐに終わりました」といった、問題量の少なさに関する記述も見られる。このことから、授業内容が理解できれば、それ以上の学習は行わない傾向がある。また、宿題に対してまじめに取り組むが、宿題以上のことは、学習していないと推察される。それ以外には、「資料がなかつたので、何を勉強すればよいか分からなかつた。」といった記述が見られることから、学習意欲があっても、具体的な問題や教材が与えられなければ、学習す

る方法がわからないために、自主的な授業外学習が行えていない場合があると考えられる。

その他の学習動機に関する記述として、「当てられた時のことも考えてできるようにしっかり考えた。」「答えるだけでなく説明できるようにするため。」といった記述が挙げられている。今回対象とした数学の授業では、学生が板書をして、問題の解説を行ったり、言葉の定義などを教員が学生を指名して聞く場面がいくつかあった。特に、このような教員の学生への関わりを学習動機に挙げている学生Aについて、この学生Aの授業外学習時間と教員の学生への関わりを分析する。表3は、クラス全体と学生Aに対して、教員が学生を指名し、問題の解説や説明を求めた回数と、学生Aの授業外学習時間、学生Aのリフレクションシートによる学習動機に関する主な記述を表している。これを見ると、第10回目の授業以降は、授業中にほとんど学生を指名していないことがわかる。また学生Aの授業外学習は、第8回目から第13回目の間は、ほとんど行われていないことがわかる。学生Aの授業外学習に関する記述を見てみると、前半は、「問題を解くだけでなく、説明できるようにしっかり考えた。」といった記述が見られるのに対し、後半は「問題が少なかつたのですぐに終わりました。」といった記述が見られ、宿題以外には授業外学習を行っていない。またテスト直前の14,15回目は、テスト勉強のために、クラス全体の平均よりも多く学習を行っていることがわかる。このことから、学生が授業中に発言したり、発表するなど、主体的に取り組む必要があるときに、学生は授業外学習を行う傾向があることがわかる。

(3) 英語の授業に関する分析

英語の授業において、学生の授業外学習時間の变化からすぐにわかることは、プレゼンテーションの準備のために授業外学習を行っていることであった。このことは、数学の授業において、学生による発表や発言が授業外学習を促していることと、ほぼ同様の学習動機であると考えられる。つまり、学生が授業に、主体的に関わるように授業設計をすることが、学生の授業外学習を促す要

表3 学生Aの授業外学習時間と教員が学生を指名した回数

授業	教員が学生を指名した回数 (回)		学生Aの学習時間 (分)	代表的な学習動機に関する記述
	全体	学生A		
2回目	7	1	0	・説明できるように言われるので、説明できるようにしっかり考えた。 ・あてられた時のために予習しておいた。
3回目	5	0	30	
4回目	7	1	10	
5回目	16	2	60	
6回目	3	0	30	
7回目	11	2	60	
8回目	8	1	0	
9回目	9	1	20	
10回目	1	0	20	
11回目	2	0	20	
12回目	0	0	0	
13回目	0	0	0	
14回目	0	0	120	・テストのため
15回目	0	0	210	

因の一つであるということである。英語の授業では、授業後アンケートの記述から、学習を行うきっかけになっているものと、モチベーションが上がる要因になっていることに関する記述を分析する。英語の授業における授業後アンケートは、履修者は20名であるが、1名は授業に参加していなかったため、19名より回収した。

- 表4は、授業後アンケートの「学習をしようと思うきっかけになっているものは何ですか？」(複数回答可)という問いの記述をカテゴリーごとに分類したものである。最も多く挙げられていたのは、プレゼンテーションであり、具体的な記述として、次のようなものが挙げられていた。
- コミュニケーション能力の向上につながるから
 - 英語でプレゼンすることは将来の自分のために非常に役立つから
 - ぜんぜんしゃべれないとはずかしいので練習した
 - プレゼンだと自分で何か事前に調べておかないと話せなくて困るから。
 - プレゼンの準備をしておかないと授業時間がむだになるから

○少人数毎のプレゼンだったので、個人個人にこっちから質問ができるから。

次に多く挙げられていたのは、担当教員に関する内容で、具体的な記述として、次のような内容が挙げられていた。

- 先生の授業はとても面白く、また、やりがいがあるのなるべく授業から学べることは学びたかったので。
- フレンドリーだから、英会話をするのははずかしいと思わなかったため、いい環境で英語の学習ができると思ったから。
- 先生が熱意を持って指導してくれたから

- その他、以下のような記述が挙げられていた。
- 次の授業で使うので、準備しておかないといけないと思ったから。
 - プレゼン内容が多いので練習や調べておくことがけっこうあった

表5は、授業後アンケートの「この授業について、学習意欲が向上したり、積極的に取り組むなど、モチベーションが上がる要因になっているこ

表4 学習をしようと思うきっかけ

記述内容	件数
プレゼンテーションについて	13
担当教員について	10
授業内容について	6
宿題について	6
教室の雰囲気について	4
配布資料について	1
友達について	1

表5 モチベーションが上がる要因

記述内容	件数
担当教員について	8
プレゼンテーションについて	5
授業がおもしろい・楽しい	3
その他	2

とは何ですか？」という問いの記述をカテゴリーごとに分類したものである。学習のきっかけになっているものと同様に、担当教員やプレゼンテーションに関する記述が多く挙げられている。具体的な記述として、次のようなものが挙げられていた。

- 先生が一人一人にはなしかけてくれる。
- 先生が親近感のわきやすい授業をしてくれたから
- 失敗を気にせずにしゃべればよいと言っていたこと。
- 先生が一人一人の顔と名前を覚えてくれていたこと。
- 先生の話が面白く、学生をグループで分けることによって全員が授業に参加できる
- 予定がしっかり立ててあるので勉強しやすい。
- この授業は基本、自分で考えることをしないと乗り切れないので、そこでもモチベーションが上がる。
- プレゼンテーションの方法やコミュニケーション能力が向上するから
- 授業の準備がしっかりなされている。

以上の結果から、学習を行うきっかけについて、「英語でプレゼンすることは将来の自分のために非常に役立つから。」といった、学生自身の英語に対する興味が、学習動機になっている場合がある。しかし、ほとんどの学生は、「プレゼンだと自分で何か事前に調べておかないと話せなくて困るから。」のように、人前で話さなければいけないため、できないと恥ずかしいといったことが、授業外学習を行うきっかけになっていることがわかる。また、教員についての記述では、「先生の授業はとても面白く、また、やりがいがあるのでなるべく授業から学べることは学びたかったの。」といった、教員のパーソナリティや、英語で話すことに自信を持たせるように学生に働きかけていることが、学習のきっかけにつながっている。さらに、「先生が熱意を持って指導してくれたから。」といった教員の授業に取り組む熱意が学生の学習を行うきっかけになっていることもわかる。

次に、モチベーションが上がる要因になっていることについて、最も多かった教員に関する記述は、「先生の話が面白く、学生をグループで分けることによって全員が授業に参加できる。」といった、学生が授業に主体的に参加できるようにする工夫が、学生のやる気を引き出す要因であることがわかる。また、「予定がしっかり立ててあるので勉強しやすい。」といった記述からは、授業の計画に合わせて、学生が自身の学習計画を立てていることが伺える。つまり、教員が授業計画を明確に学生に伝えることが、学生の授業計画を立てる動機につながっているのではないかと考えられる。その他に「先生が一人一人の顔と名前を覚えてくれていたこと。」といった記述からは、教員が学生をクラス単位でとらえるのではなく、学生一人一人に興味を持って接していることが、学生のモチベーションを上げることににつながっていることがわかる。

5. 分析結果のまとめ

これらのデータのみで、一般化を図るには不十分などころがあるが、以上の分析より学生の授業外学習を促す要因として、①授業方法、②授業の

設計、③課題、④教材・資料、⑤学生理解の5つの内容について、因果関係が見えてきた。①授業方法については、学生を指名して問題の解説などを求めたり、グループワークやプレゼンテーションなどを用いて、学生全員が参加するような授業を行うことが考えられる。つまり、学生が授業中に教員の説明を聞くだけでなく、学生自身も授業に対する準備を行い、授業の中で準備したことを、発言をしなければならないような学生主体となる授業方法とることである。②授業の設計については、授業内容のレベルを、授業を受けるだけで理解できるものではなく、予習や復習をしなければならないレベルに設定しておくことである。③課題については、適度な量の宿題を出し、少し難しいレベルの問題も選択課題として出題しておく。④教材・資料については、次回使用する資料などは早めに配布し、同時に予習するポイントや勉強方法なども指示をしておく。⑤学生理解については、学生の顔や名前を覚え、声をかけることが、学生の授業に対するモチベーションを上げる要因になっている。

今回明らかになった、学生の授業外学習を促す要因として考えられる内容は、例えば、名古屋大学の「成長するティップス先生」¹²⁾ などにも紹介されている内容と重なる部分がある。また大学において授業経験を重ねていくことで、直感的に理解できることも含まれているのではないだろうか。本研究における調査では、実際に質的なデータとして、同様の傾向が伺えることが示されたといえる。

6. FDの構築に関する考察

徳島大学では2002年度より、全学FD推進プログラム第1期計画(3年間プロジェクト)の実施が始まり、今年度は全学FD推進プログラム第3期計画の最終年度を迎えている^{13), 14), 15)}。そこで、ここからは徳島大学の全学FD推進プログラムにおいて、今回の調査によって明らかになった内容を、どのような形で生かすことができるのかについて考察を行う。

まず、①授業方法について考察をする。主体的に学生を授業に参加させることは、学生の授業外

学習の動機を高める一つの要因であった。今年度の第2回FD・SDセミナーでは、「聴衆応答システム(クリッカー)の実践入門」を話題として取り上げ、また教育力開発基礎プログラムの中で、参加型授業をテーマとした講義を実施した。しかし、その他に、学生を主体的に授業に参加させるための工夫や手法などをレクチャーするFDは、ほとんど実施されていない。一方で、徳島大学が作成した「ティーチングライフ」^{※2}の調査において、今後どのようなテーマのFD活動が必要だと思いますか?(項目選択、選択制限なし)という設問では、「問題ある学生への対応」と答えた教員が35%と最も多く、次いで「基本的な教育技術(教授法)(30%)」、「参加型授業の仕方(24%)」、「大人数授業の仕方(23%)」と続いている。このことから、学生主体の授業方法をテーマとしたFDのニーズは、高いのではないかと推察できる。教員が自身の授業の中で、すぐに実践することができる知識やスキルを学ぶ、スキルアップセミナーのようなものが日常的に開催されれば、教員は、自身の授業に合った授業方法を見つけることができる機会が増えるのではないだろうか。その際には、センター教員が講師を務めるだけでなく、それぞれの教員が自身の授業の中で工夫している点や、成功体験、あるいは失敗談を持ち寄り、参加者と共有することで、相互に学ぶことができる場を提供することも、FDの一つの企画であろう。

続いて、②授業の設計、③課題について考察をする。授業の内容、レベル、課題などの設定には、学生のレベル、教えるべき内容、学科としての到達目標を考慮する必要がある。徳島大学の全学FD推進プログラムの「授業コンサルテーション」の中で、授業研究会を実施している。ここでは、コンサルテーションの対象教員、センター教員の

※2 平成20年度に徳島大学の学士課程の授業を担当する全ての教員(非常勤講師は除く)を対象に、教員の教育に対する意識と取り組みについて把握すると共に、大学教育の質向上のために、アンケート調査を実施し、「ティーチングライフ」を作成した。アンケートの回収率は、51%であった。

他、同僚教員や同じ部局のFD専門委員、学科長などが参加して、授業内容に踏み込んだ自由な議論が行われている。このように、学生が身につけるべき専門分野の知識や学生のレベル、授業目標の設定などは、同じ専門分野の教員同士であるからこそ、議論できる内容である。授業レベルでのFDは、各部局と協力して、現場の状況を語り合い、同僚間で実施できるような研修として、今後とも続けていくことが、実質的なFDを行う上では必要不可欠である。

次に、④授業で使用する教材や資料について考察する。授業で使用する教材や資料は、事前に手に入れることが、学生が授業の予習を行う動機につながっていた。今回対象とした授業では、徳島大学のu-Learningシステムにおいて、学生は教材・資料を授業の前に入手することができた。授業の終わりに、次の授業の資料などを教員が学生に配布することで、事前準備を促すことができるが、多忙な教員にとっては困難な面もある。そこで、徳島大学が提供しているICTを利用することも一つの工夫である。FDとしては、徳島大学のu-LearningシステムやEDB/CMS、LMS、お知らせシステムなどの利用の仕方についてのセミナーなどが考えられる。実際、今年度の第1回FD・SDセミナーでは、徳島大学の情報インフラを授業実施の際にどのように活用すればよいかということ、話題として取り上げた。このようなセミナーを1回限りで終わらずに、実習なども取り入れ、システム紹介及び実践例や利用するメリットなども一緒に、レクチャーするセミナーとして発展することが考えられる。そして、実際に利用する教員が増えることになれば、学生の認知度も高くなり、学生の授業外学習につながるのではないだろうか。

最後に、⑤学生理解について考察をする。これは教員のパーソナリティなどが大きく影響を与えることも考えられるが、大切なことは教員自身が学生に対し、積極的に関わろうとすることである。実際に、学生への声かけや、学生のことを理解しようとする態度が学生との信頼関係の構築につながり、それが学習へのモチベーションになっていた。このような態度を、FDのみによって

身につけることは困難である。しかし、例えばこれも①の場合と同様に、教員同士が工夫している点や、成功体験、失敗談などを情報共有することができれば、それが教員の授業改善を行うきっかけとなるのではないか。

近年、FDの実質化が叫ばれるようになったが、FDを実質的なものにするためには、このように学生からの客観的なデータを収集し、FD活動に活かしていくための研究を行っていくことが重要になってくるのではなかろうか。今回のデータは、授業外学習に焦点を当て、2つの授業において収集したものである。今後は、対象授業や対象学生を増やして研究を進めていく必要がある。

参考文献・参考資料

- 1) 文部科学省：大学教育審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」, 1998.
- 2) Benesse 教育研究開発センター：大学生の学習・生活実態調査報告書, 2008.
- 3) 電通育英会：大学生のキャリア意識調査, 2008
http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/tto_2008.html#anc02 (2010. 12. 31)
- 4) 葛城浩一：学習経験の量に対するカリキュラムの影響力, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第3部 57, 133-140, 2008.
- 5) 山田浩之：学生の学習行動, 広島大学教育叢書, 90, 11-23, 2007.
- 6) 文部科学省：中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」, 2008.
- 7) 藤岡完治：大学授業の構造と学生の学習経験の関連に関する研究, 京都大学高等教育研究, 7, 1-23, 2001.
- 8) 溝上慎一：大学生の学習意欲, 京都大学高等教育研究, 2, 184-197, 1997.
- 9) 久保田賢一：構成主義パラダイムと学習環境デザイン, 関西大学出版部, 2000
- 10) 中原淳、長岡健：ダイアログ対話する組織, ダイアモンド社, 2009.
- 11) 澤田忠幸：多次元的な“学生による授業評価”活用の有効性, 大学教育学会誌, 31, 132-139, 2009.
- 12) 池田輝政他：成長するティップス先生, 玉川

大学出版部, 2001.

- 13) 曾田紘二他 : 2009 年度徳島大学全学FD推進プログラム実施報告, 大学教育研究ジャーナル, 7, 211-226, 2010.
- 14) 徳島大学FD専門委員会 : 徳島大学FDの歴史, 1-8, 2008.
- 15) 平成 22 年度徳島大学全学FD推進プログラム実施計画, 2010.
<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/fd/article/0000495.html> (2010. 12. 31)